

# Course N@viの活用で、学生の自主性を重視した授業を実現 最大限の学習効果を目指す



ドーラン・ダニエル P.  
商学学術院 教授

「Corporate Governance(企業統治)」を担当するドーラン・ダニエル教授は、教員が一方的に講義をして学生は教えてもらうだけというような伝統的な授業スタイルではなく、学生(=学習者)が主体的に学ぶ授業を目指している。そのために、Course N@viを活用して、グループワークなどの反転学習を積極的に授業に取り入れている。

## 「学生は『students』ではなく『learners』」 学生の主体性を重視して授業を運営する

ドーラン教授が、授業でCourse N@viをどのように活用しているのかを説明する前に、まずは「授業」についてどう考えているのか、その基本姿勢を説明しておく必要があるだろう。なぜなら、ドーラン教授の授業や学生に対する考え方は、Course N@viの活用方法に深く関わっているためだ。

「私は、学生のことを『students(生徒)』ではなく『learners(学習者)』と呼んでいています。その理由は、『students』は学ぶ過程にフォーカスしているニュアンスがありますが、『learners』のほうは学習の過程ではなく到達すべき目標にフォーカスしているからです。また、そもそも私の“辞書”には「lecture(講義する)」するという言葉はありません。一方的に、こちらが講義をして学生はただ聞いているような授業を行うのではなく、私のクラスでは学生が主体となった授業をしたいと考えています」。

いま目の前にいる、今期の学生のための最も意義のある授業を提供したいというドーラン教授の思いは、たとえば「シラバスの見直し」といった行為にも表れている。ドーラン教授が担当する科目では、今回受賞の対象となった「Corporate Governance」に限らず、学生の知識レベルやニーズに合わせて基本的に授業計画の全面的な見直しをしているという。

「初回の授業では、必ず学生たちのこれまでの経験や何を勉強したいのかについて詳しく聞き出し、彼らの希望を踏まえて私には何が提供できるのかをよく考えます。そして次の回では、新たにプランニングしたシラバスを提案しています。大事なのは、今期の学生たちが最大限の学習効果を発揮できるような授業の計画を作ることだと考えています」。

つまり、シラバスに学生を合わせるのではなく、学生に合わせて学ぶ内容を変えているのだ。また、授業の計画は回が進んでから再度変更することもあるという。「学生の様子を見て、学習進度に合わせて、再度見直すということは珍しくありません。学生のほうでも、自分たちのための見直しであると理解してくれているので、特に不満などは出ませんね」。

## テキストの配布から反転学習の実現まで学生主体の授業のためにCourse N@viをフル活用

一方的な講義形式ではなく、学生が主体となった授業を展開するためにCourse N@viは欠かせないICTツールだとドーラン教授は語る。まず、授業で使用するテキスト資料は、基本的にCourse N@vi経由で配布している。「Course N@viであらかじめテキストを入手できる状態にしておくことで、学生たちは自分の学習計画を作ることができます。逆に言うと、彼らには自らの責任で事前にテキストを入手して、次の授業までに準備しておくことを求めています」。

なお、事前のテキスト配布は単に予習のためではなく積極的な「反転学習」を行うためだ。これについては、次の項目で詳しく説明する。

Course N@vi経由で宿題を出したり、さまざまなインフォメーションを伝えたりすることもある。「そのため、学生には毎週必ずCourse N@viを見るようにと伝えています」。

また授業の後で、学生から質問やコメントがCourse N@viに届くことも少なくない。「教室の延長線上にCourse N@viがあるという感覚で、学生が気軽に質問などをできるのもCourse N@viのメリットだと言えるでしょう」。

中でも、Course N@viの最もよい点としてドーラン教授が挙げるのは、すべての記録がCourse N@viの中に残ることだという。「過去の資料が見当たらない、宿題を忘れたといったちょっとしたトラブルのときに、いちいち教員に聞かなくても学生が自分でCourse N@viの履歴を探して見つけることができます。小さなことですが、こうした点も学生が自主的に学習するツールとしてCourse N@viが優れているところだと思います」。

さらに、今後は掲示板機能を利用するなどして、クラス内で作ったグループの議論などにもCourse N@viを活用していきたいと考えているそうだ。

## 反転学習+グループディスカッション 教え合うことで最大限の学習効果が得られる



さて、Course N@viで事前配布されたテキストを読んできた学生は、教室では反転学習に臨む。具体的には、それぞれが勉強してきたテキストの内容やそこから得られた知識を使って、グループワークを行う。「グループワークに入る前には、毎回必ず『事前学習を通してどこがいちばん興味深かったか？ その理由は何か？』というstandard questionを投げかけています。教員が、『今日のポイントはここです』と指示するのではなく、学生一人一人の視点や考えを大事にしたいからです」。

グループワークの際には、ディスカッションだけではなく学生同士による「教え合い」もよく行っているという。ドーラン教授は、これを「教員と学生の役割の反転」と説明する。「学習するのに最適な方法は、人に教えることだからです。また私自身が、学生たちの教え合う様子から新たな指導方法やアイデアなどを学ぶこともあり、そういう意味でも『役割の反転』があるとと言えます」。

グループワークのときには、ホワイトボードやPCなどのICTツールは、自由に使えるようにしている。個人のPCの持ち込みや利用も制限していない。これも、学生が自主的に学習することを推奨する一環だ。「わからないことがあったときにまず教員に聞くのではなく、PCで調べたりホワイトボードを使って人に説明したりすることに意味があると考えています。先にわかった人が、答えをみんなにシェアするような使い方もいいですね。こうした学習姿勢が最大限の学習効果を生み出し、学生たちのモチベーションにつながると思っています」。

ほかにも、学生の自主性を尊重した新しい取り組みとして、2017年度はレポートの提出方法を3つの中から学生に選ばせたという。「あらかじめ準備したものを提出するか、教室でゼロから書くか、準備したレジュメを持ってきて教室で書き直すか。大事なものは、暗記力ではなくあくまでリソースを自分で集めてまとめる力だと思うので、あとはその学生ごとに最もパフォーマンスを発揮できるアウトプット方法を選ばせたいと考えたからです」。

## 学生の理解度をその場で知るために 次年度はWeb版クリッカーの活用を検討

Course N@viを授業にフル活用しているドーラン教授だが、今

後もう一つ活用していきたいと考えているICTツールがある。それはインターネット上で利用する投票ツールの「Poll Everywhere」だ。

「昨年、海外の大学でFD(ファカルティ・デベロップメント)研修に参加した際、試しに使ってみて大変使いやすいと感じたので、私の授業にも導入しようと考えました。実は、2017年度にも何度か導入を試みましたがセットアップで躓いてしまい、残念ながら導入には至っていません」。

「Poll Everywhere」を使いたい理由は、学生が授業の内容を理解できたかどうかなどをその場で確認したり、学生が勉強したいと考えている事柄に取り組めているのかを把握したりしたいからだという。「たとえば、その日の授業が終わった段階で、今日のディスカッションで取り上げた概念についての程度理解できたかを、選択肢の中から選んで評価してもらおうといった使い方です。特に、この『Corporate Governance』ではけっこう難しい概念も扱っているため、学生がどの程度理解しているのかは気になっています」。

仮に、クラスの半分以下しか理解できていないなら、もっとケーススタディを増やすなどの対策を検討すべきだし、逆に9割が理解していれば安心して次に進めるといった判断材料になる。「教員だけでなく学生にとっても、みんながどれくらい理解できているのかわかることは意味があると考えています」。

また、「Poll Everywhere」の「匿名性」が、日本人学生に合っているとも指摘する。「日本人学生は、なかなか人前で『ここがわからなかった』と言いつらいんですね。『Poll Everywhere』なら誰が何に投票したかわからないので、プレッシャーなく本当のことを言えると思います」。ちなみに、レポートの評価も「匿名性」を確保した上ですべてオープンにしている。自分がクラスでどの位置にいるのかわかることが、学習のモチベーションにつながるからだ。

「次年度は、『Poll Everywhere』の設定に再チャレンジしたいと考えています。併せてWeb版クリッカーの『わせポチ』についても調べて、どちらか使いやすいほうを授業に取り入れていきたいですね。Course N@viやクリッカーなどのICTツールを取り入れて、学習効果を最大限に発揮できる手助けをすることが教員としての務めです。プロフェッショナルとしての責任を今後も果たしていきたいと考えています」。